



蒲郡の競艇場ができる前、あのあたり一帯は、塩田が広がる地域でした。かつて三河湾の沿岸部では、ところどころで塩作りが行われていましたが、その中でも塩津地区では多くの人々が製塩業に携わっていました。

「蒲郡の古いはなし 第2集」(昭和48年発行)に古老から聞き取った事柄が載っています。

「塩津で忘れられんのは、塩だ。米の収入より塩の方が多かった。…天びんぼうでかついで足助までよく売りに行ったが、遠くの山の中までもって行けば、よい値になった。いまの鹿島保育園のところに港があって、二はいの舟がいて塩を買ってくれた。楽なかわりに、むろんいい値ではなかった。勢のよい人は、足助の方へかついで行き、そうでない人は、舟に売るといわれた」

塩田があった



塩田風景(戦前)

蒲郡から足助まで、直線距離でも30キロ以上はあります。この記述は明治の頃の話として書かれています。重い天びんぼうをかついで、足助まで往復した当時の人々の力強さに驚きます。

「塩をとる仕事は、重労働で腹が減ったものだ。あるとき、あまり腹が減ったので、べんとうをもう一度持ってきてくれといったら、『あれは二へん分だった』といわれてしまったことがあった。一ろじ十二個はいるうどんを平気で一人で食べた」

塩田に砂をまいたりカンスイ(塩分を多く含んだ水)をになつて運ぶ作業は、大変な力仕事だったと聞きます。また、カマにマキや石炭をくべ、塩水をつめて、塩をとる作業も苦労が多かったことでしょう。

博物館の民俗展示室には、かつて塩作りの現場で用いられていた道具が展示されています。ぜひ一度ご覧ください。

2億年のフームホール



木を見て虫を見ず…

by たんぽぽ



科学館に「珪化木」(けいかばく)という木の化石が展示されています。約2億年前、砂や泥とともに湖底に堆積し、石の成分が浸透して石化したものです。触るとヒンヤリ、どっしり重く、ところどころ水晶やアメジストなどの宝石が煌めいています。

先日、科学館とある学会が開かれた際、昆虫関連の専門家が珪化木を囲んで「あるある」「こっちにも!」と盛り上がっていました。宝木のことかと思ったらそうではなく、なんと「虫喰いの痕」とのこと。太古の木も現在と変わらず、倒れた後は虫に喰われて穴だらけになっていたらしい、化石からそ

の様子がわかる、というのです。いろいろ説明を聞くうちに、虫に喰われつつある倒木の柔かさや、朽木を寝床や餌にする小さな生物たちの世界が見えるような気がしました。

日ごろ見慣れたものの中にも、驚きの種が隠れているものですね。

